

知的障害児への性教育実践の改善に関する基礎的視点の検討(3)

中学校特別支援学級における性教育実践をもとに

児嶋芳郎

(広島都市学園大学)

KEY WORDS: 性教育, 知的障害, 実践の継続

1. 研究の目的

本研究は、2014年度からの継続研究であり、その目的は、特に教師が困難を感じる知的障害児への性教育において、教師がどのような観点をもって実践に臨む必要があるかを検討し、その後の授業改善の方向を探ることである。

2. 研究の方法

発表者は、中学校知的障害特別支援学級（以下、A学級）において2014年度から行われている性教育実践に継続して授業計画の立案から関わり、授業参観及び担任教師との検討を重ねて、授業改善に携わってきた。

3. A学級の状況

A学級はB県B市にある全校生徒約600名規模のC中学校に設置されている知的障害特別支援学級である。C中学校にはA学級とは他に自閉症・情緒障害特別支援学級が設置されている。2016年度のA学級には、1年生1名、2年生2名、3年生3名の計6名が在籍しており、学級担任1名、指導員1名の計2名で指導を行っている。

2016年度は新入生1名と3年生への途中入級の2名が加わった。生徒の知的障害の程度は軽～中程度であり、書き言葉を使用する学習が成立する段階である。

4. 実践の概要

研究の対象は、2016年度にA学級で行われた性教育実践である。「いのち・私のすてきなからだ」との単元名（3年間継続）で、全10回の授業が行われた。全10回の授業は、その内容により大きく4つに分類することができる（表）。

表 A学級における性教育実践の展開（全10回）

	大分類	授業タイトル	授業の目標	時数
1	いのちの大切さを 知る	命の誕生①	いのちの大切さを 知る	1
		命の誕生②		1
		自分の誕生から これまでの成長		1
2	体の仕組み・性器 を知る	二次性徴①	人の体の仕組み・性器 を知り、自分の体を大 切にする気持ち（自己 肯定感）を育てる	1
		二次性徴②		1
		プライベートゾ ーン		1
		月経・射精		1
3	きもちいいからだ	セルフプレジャー	セルフプレジャーにつ いて正しく理解させる	1
4	好きになる心	恋、相手を大切に する気持ち	異性を好きになること のすばらしさと注意す べき点について理解さ せる	1
	まとめ			1

5. 実践の実際

A学級での性教育実践は、二次性徴や性的な人間関係の形成に関する内容を中心としている。

A学級では、初めて性教育実践に取り組んだ2014年度の当初は、生徒たち及び保護者に「性」に対するネガティブなイメージが多々あった。それにより、授業への消極的な姿勢があった。しかし、2015年度の実践はネガティブなイメージを払拭することから出発したことによって、生徒たちに授業に対する積極的な姿勢が生まれた。特に上級生の積極的な姿勢は、中学校での性教育に初めて参加した1年生に対して好影響を与えた。

2016年度は、引き続き「自分の体に対してマイナスのイメージを持たさない。性や性器に対する悪い・汚いなどというイメージを持たさない」に特に注意し、毎回の実践が終了したあとは、学級通信で授業や生徒たちの様子を伝えるなど、家庭との連携を密にしていた。

6. 考察

児嶋（2012）は、障害児への性教育実践の継続期間としては6年未満が多く、長年継続していくことが困難であると指摘している。A学級での継続期間は3年とまだまだ短い。継続していくことの効果の一端が見られた。

まず、性に対してマイナスイメージをもたない学級文化の芽生えを挙げることができる。ある生徒は、新たに学級に加わった生徒から、性的なからかいのようなことがあった際に、担任教師に「先生、早くちゃんと性教育の時間を！ 勉強しないとイケない」と発言した。また、保護者からも毎年の性教育への期待の声が大きくなり、授業への資料提供なども、より積極的になっている。A学級では3年生から入級した生徒がいるが、そういった生徒たちも、この学級文化があることによって、性に対するネガティブなイメージを変化させやすいのではないかと。

あわせて、従来はネガティブなイメージを抱えている「性」に関する話題を出してもいい学級文化が醸成された場合、生徒たちは授業における失敗を恐れなくなるであろうし、本音を出し合える集団へと変化するであろう。このことは性教育に留まることなく、特別支援学級での学習全般に正の影響を与えるであろう。

また、この3年間の実践は、授業時数こそ若干のちがいはあるものの、同じ内容をくり返し行っている。在学生にとっては、学びの見通しをもちやすく、知識の定着につながったのではないかと。

7. まとめ

性教育実践の効果を上げるためには、まず「性」をネガティブにとらえない学級文化の醸成が必要であり、それは実践を継続していくことによって、よりたしかなものになっていくであろう。また、実践の継続は、当然のごとく、学びの見通しをもち、知識の定着にもつながるものであることが、A学級においてはたしかめられた。

文 献

児嶋芳郎（2012）知的障害児への性教育の在り方に関する実証的研究。東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所・博士（教育学）学位論文。

(KOJIMA Yoshio)